The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	友人同士の自由会話におけるポライトネス・ストラテジー : 同性間の会話からみる日韓差とジェンダー
Author(s)	張, 允娥
Citation	大阪大学, 2017, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61398
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　　張　允　娥　　）	
論文題名	友人同士の自由会話におけるポライトネス・ストラテジー ―同性間の会話からみる日韓差とジェンダー―

論文内容の要旨

本研究は、ポライトネスを相互行為というレベルから捉え、日韓の親しい間柄の女性同士と男性同士の日常的な自由会話におけるポライトネスのあり方の類似性と多様性を分析するものである。従来のポライトネス、対照研究、ジェンダー差を探った多くの研究では、特定の場面（勧誘、断りなどの言語行動や話題）を設定して、それらの言語行動に見られるストラテジーを分析したり、ポライトネスをある特定の言語形式に結び付けられたものと捉えて分析したりすることが多かった。しかし、ポライトネスの研究において重要なのは、それぞれの相互行為においてどのような装置が、参加者の関係構築に寄与しているかという人間関係に果たす影響であると考える。そこで、本研究では、日韓男女のそれぞれの日常的な自由会話で、どのような相互行為が繰り返し観察され、友人との親密な関係構築に貢献しており、どのようなFTAが許されているのかを明らかすることで、いかなる行為が日韓男女の相互行為において親密な関係を構築する装置となっているかというポライトネスのあり方を実証的に探求し、ポライトネスのあり方に日韓という異なる言語・文化、およびジェンダーという要因がどのように関わっているのかを明らかにすることを目的とした。

本研究で扱った会話データは、日韓の親しい間柄の男性同士と女性同士の日常的な自由会話（約500分）である（日韓それぞれ男性4組、女性4組、計16組の会話、それぞれ約30分～35分を文字化したデータ）。本研究では、相互行為におけるポライトネスのあり方を明らかにするためには、一つの発話やごく短い発話のみの分析だけではなく、会話の全体的構造と会話の局所的に見られる相互行為との関連性に注目する必要があると考え、会話の全体的な構造の観点からは、A. 会話展開の仕方と「語り」連鎖、B. 話題構成のあり方と話題管理、局所的な相互行為の観点からは、C. 直接話法、D. ＜理解＞、＜感情・感想＞の発話、E. ＜同意・共感＞の発話、F. ＜不同意＞、＜否定的評価＞の発話に注目して分析を行った。分析の結果、日韓差またはジェンダー差が観察された場合、ポライトネスのあり方に差が見られた理由は何かについて考察を行った。

本研究は、5部構成になっている。第Ⅰ部は序論とし、第1章では、Brown & Levinson（1987）のポライトネス理論とインポライトネスについて説明した後、ポライトネス理論の観点から日韓差を探った研究と相互行為における男女差を探った研究を概観し、相互行為におけるポライトネスのあり方を分析する意義について述べ、本研究の分析の立場と課題を提示した。第2章では、本研究の議論と関わる日韓の対人関係の捉え方と、ジェンダー役割の社会化に関する研究について述べた。第3章では、会話データと話題区分調査の概要と文字化資料に用いる記号について説明し、第4章では、本研究の分析の枠組み（内容と会話の参加形式の面から）と本研究で注目する現象について述べた。

第Ⅱ部から第Ⅳ部は各論であるが、それぞれ、日韓差が顕著なもの（第Ⅱ部）、日韓同様なジェンダー差が観察されるもの（第Ⅲ部）、日韓差とジェンダー差両者が認められるもの（第Ⅳ部）にわけて分析を行った。

まず、第Ⅱ部の第5章では、話題管理の観点から話題の情報源と「語り」の開始方法に注目して分析を行った。その結果、話題が一人の参加者の「語り」によって構成された場合、日本語の会話では自己開始が圧倒的に多く観察されるのに対し、韓国語の会話では他者開始がより多く観察された。このような相違は、日韓の自己呈示の程度の差と相手に踏み込む度合の相違から生じると考えられることを論じた。第6章では、主に聞き手によって用いられる＜理解＞と＜感情・感想＞を表す発話に注目して分析を行った。その結果、日本語の会話で聞き手は、話し手が語りやすい環境を作り上げることに重点をおいて相互行為に参加するのに対し、韓国語の会話において聞き手は、話し手の「語り」をじっと聞いてあげることが期待されるため、日本語の会話に比べ、＜理解＞と＜感情・感想＞を表す発話の相対使用頻度が低いことが明らかになった。このような違いは、日本と韓国という異なる言語・文化で聞き手に期待される役割が異なっていることが要因として考えられることについて論じた。

次に、第Ⅲ部の第7章では、日韓ともに同様のジェンダー差が観察された会話展開の仕方と後続「語り」に注目して分析を行った。その結果、男性同士の会話の場合、会話の参加者の役割関係が相対的に明確なソロパートが中心となり、互いに新情報を語り合うことで会話を展開していくのに対し、女性同士の会話は参加者の役割関係が明確ではな

いデュオパートが中心となり、共同で何かについて話し合うということで会話を展開していることについて述べた。このような特徴は、後続「語り」がいかなるストラテジーとして用いられているかという面にも表れ、男性同士の会話で、後続「語り」は話題と関連する情報を提供し、会話展開に貢献するストラテジーとして用いられる傾向が強いのに対し、女性同士の会話で後続「語り」は、類似した経験談の語り合いによるバランスのストラテジーと共通点を主張するストラテジーとして用いられる割合が高いことが明らかになった。男性同士の会話では、むしろ不同意や反論を表す後続「語り」が多く観察されるが、FTAとして解釈されるよりは、新情報として捉えられているような相互行為が見られ、これは、女性同士の会話と男性同士の会話で用いられるポライトネス・ストラテジーに相違点が見られる可能性があることを示唆していることについて述べた。つぎの第8章では、相手に共通の意見や感情を主張する＜同意・共感＞に焦点を当て分析を行った。その結果、男性同士の会話では、相手の＜同意・共感＞の発話を新情報として捉えているため、それを大げさに強調することはなく、＜同意・共感＞を表す発話は単発的に用いられることが多いが、女性同士の会話においては、相手の＜同意・共感＞の発話は、単なる新情報ではなく、互いの共通の意見や感情を強調できるポイントとして捉えられ、＜同意・共感＞の発話を互いに積み重ねて強調することで親密な関係を強めていた。その結果、男性同士の会話に比べ、女性同士の会話で＜同意・共感＞の相対使用頻度が高い結果が得られていると考えられる。

第Ⅳ部では、日韓差とジェンダー差両者が認められる直接話法と＜不同意＞と＜否定的評価＞を分析した。まず、第9章では、話し手と聞き手が用いる直接話法と、仮想フレームを構築する直接話法を分析した。その結果、日韓男女に関わらず、直接話法は参加者の間主観性の構築に大きく寄与しているが、日本語の会話では、＜第三者＞の発話を直接話法で用いる割合が高く、直接話法は聞き手を楽しませ、笑いを生み出すストラテジーとして用いられる傾向があり、互いに笑い合えるような経験談を共有し合うことで親密な関係を構築する傾向が強い。一方、韓国語の会話では、＜自己発話＞が直接話法で用いられる割合が高く、直接話法は聞き手の共感を導くストラテジーとして用いられる傾向があり、相手と共感し合える側面を直接話法で強調することで、互いの考えや感情を分かち合える自己呈示を行う傾向が強いことが分かった。このような差は、どのような自己呈示が友人同士の会話で適切とされているかということが日韓で異なっていることが要因としてあることについて述べた。また、聞き手の直接話法の使用傾向と仮想フレーム構築にはジェンダー差が見られ、男性同士の会話に比べ、女性同士の会話で、聞き手は直接話法を用いて「語り」に共感を示したり、より具体化させることで話し手を支持していたり、「語り」の展開に貢献したりすることが多く、協力的に仮想フレームを構築していく相互行為を通じて、共通基盤を確認しつつ親密な関係を構築していく傾向が見られた。つぎの第10章では、＜不同意＞と＜否定的評価＞の発話が「対立」関係を形成する場合と「冗談」として用いられる場合の相互行為、および「冗談」の種類と「冗談」フレームの構築プロセスを分析した。その結果、日本語の会話で「冗談」を言う側は、明確に「冗談」であることを表すが、韓国語の会話では、真面目に発話される場合があり、その発話をどのように受け入れるかは聞き手の解釈に任せているような相互行為が観察された。また、日本語の会話では、相手の話につっこみを入れるような「冗談」が主に観察されるのに対し、韓国語の会話では、相手の本質的な事柄に触れる度合いが高い事柄が対象となる「冗談」が多く観察された。これは、日韓の親密な関係の間柄で、フェイスを侵害する行為に対する許容度の違いから生じていると考えられることについて述べた。また、＜不同意＞や＜否定的評価＞の発話は、女性同士の会話に比べ、男性同士の会話で多く観察され、これらの発話が「対立」関係を形成する場合の相互行為と「冗談」として用いられている場合の相互行為にジェンダーによる違いが見られた。これらの違いは、親密な関係を構築するための装置が男性同士の会話と女性同士の会話で異なっていることから生じており、男性同士の会話では、＜不同意＞や＜否定的評価＞を用いた言い争いのような「冗談」の相互行為が親密な関係の構築に大きな装置として用いられていることについて論じた。

第Ⅴ部の第11章では、各章で明らかになった分析結果をまとめ、日韓男女の会話に見られるポライトネスのあり方が、日韓の対人関係の捉え方、ジェンダー役割とどのように関連しているのかについて総合的な考察を行った。そして、日韓男女の会話におけるポライトネスのあり方には、日韓のそれぞれの言語・文化における対人関係の捉え方の違いというマクロ的な文化差と、文化的集団内に見られるミクロ的なジェンダー差が同時に影響を及ぼしており、日韓の男女は、マクロとミクロの部分への対応をしながら、それぞれ特有のやり方で友人とコミュニケーションを行うことで、親密な人間関係を維持また構築していることについて論じた。本研究では、関西地方の20代の男女と、京畿地方の20代の男女の親密な間柄の同性間の自由会話といったごく一部の地域の男女の会話を分析データとして扱っているが、全ての日本と韓国の男女が本研究の結果と同様なふるまいをしているとは限らない。しかし、本研究は、日韓差とジェンダー差の観点から日韓男女のそれぞれの自由会話に繰り返し観察されるポライトネスのあり方を探ることで、人との関わり方とポライトネスのあり方の多様性を理解する 一歩として意味があると考えている。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　張　允娥　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	大阪大学　教授	渋谷　勝己
	副 査	大阪大学　教授	マシュー　バーデルスキー
	副 査	大阪大学准教授	高木　千恵

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　友人同士の自由会話におけるポライトネス・ストラテジー
―同性間の会話からみる日韓差とジェンダー―

学位申請者　張 允娥

論文審査担当者
主査　大阪大学教授　　渋谷　勝己
副査　大阪大学教授　　マシュー　バーデルスキー
副査　大阪大学准教授　高木　千恵

【論文内容の要旨】

本論文は、ポライトネスを相互行為というレベルにおいて捉え、日韓の親しい間柄の女性同士と男性同士の日常的な自由会話におけるポライトネスの類似性と多様性を分析することを目的としたものである。５部 11 章より構成され、本文Ａ４判 262 ページ、400 字詰原稿用紙に換算して約 600 枚の分量である。

「第Ⅰ部 序論」は４章からなる。第１章では、Brown & Levinson のポライトネス理論の観点から本論文の分析の立場と課題を提示した。第２章では、日韓の対人関係の捉え方およびジェンダー役割の社会化に関する先行研究をまとめ、本論文との関係を指摘した。第３章では調査の概要と文字化資料に用いる記号について説明し、第４章では本研究の分析の枠組みと注目する相互行為事象を体系的に整理した。

第Ⅱ部から第Ⅳ部は本論である。いずれも２章で構成されている。

「第Ⅱ部 日韓差が顕著なもの」において、第５章では話題の情報源と「語り」の開始方法に注目して日韓の会話に見られる差異を分析した。話題が一人の会話参加者の「語り」によって構成された場合、日本語の会話では自己開始が多く観察されるのに対し、韓国語の会話では他者開始がより多く観察されると指摘し、このような違いをもたらした要因は日韓の自己呈示の程度および相手に踏み込む度合の相違にあると論じている。 また、第６章では、聞き手が話し手に関心を示すポジティブポライトネス・ストラテジーである＜理解＞と＜感情・感想＞の発話を取り上げ、日本語の会話では聞き手は話し手が語りやすい環境を作り上げることに重点をおいて相互行為に参加するのに対し、韓国語の会話では、聞き手は話し手の「語り」を注意して聞くことが期待されることから、日本語の会話に比べ＜理解＞と＜感情・感想＞を表す発話の使用頻度が相対的に低いことを明らかにした。

「第Ⅲ部 ジェンダー差が顕著なもの」では、まず第７章において、日韓で類似するジェンダー差が観察された会話展開のしかたとそれに続く「語り」に注目し、男性同士の会話では会話の参加者の役割関係が相対的に明確なソロパートが中心となり、互いに新情報を語り合うことで親密な関係を作り上げていくのに対し、女性同士の会話は参加者の役割関係が明確でないデュオパートが中心となり、共同で何かについて話し合うという相互行為を通じて親密な人間関係を構築していること、また、それに続く「語り」は、男性同士の場合話題と関連する新たな情報を提供して会話展開に貢献するのに対し、女性同士の会話では共通点を主張するストラテジーが高い割

合で用いられる傾向があることを指摘した。続く第８章では相手に共通の意見や感情を主張する＜同意・共感＞の発話に注目し、男性同士の会話では＜同意・共感＞を表す発話は単発的に用いられることが多いが、女性同士の会話では＜同意・共感＞の発話を互いに積み重ねることで親密な関係を強めていることを明らかにしている。

「第Ⅳ部　日韓差・ジェンダー差の両者が認められるもの」では、第９章で話者が用いる直接話法を分析し、日韓の男女ともに、直接話法を自らの情報や経験談を相手と共有し合うために用い、会話参加者の間主観性を構築しようとしている点は同じであるが、どのような人物の発話を引用するかには日韓で違いがあり、日本語の会話では第三者の発話が、韓国語の会話では自身の発話が、直接話法によって提示されることが多いことを指摘した。また男女差についても、女性同士の会話では、聞き手は直接話法を用いて話し手の語りに共感を示すことによって話し手の語りの展開に貢献することが多いといった特徴を見出している。第 10 章では＜不同意＞と＜否定的評価＞の発話を分析し、日本語の会話では「冗談」を言う側は自らの＜不同意＞や＜否定的評価＞が明確に「冗談」であることを表すが、韓国語の会話ではそれが真面目に発話される場合があり、その発話をどのように受け入れるかは聞き手の推論に任せているような相互行為が観察されること、また、女性同士の会話よりも男性同士の会話に＜不同意＞や＜否定的評価＞の発話が多く使用されること、などの相違点を見出している。

「第Ⅴ部　総括」の第 11 章では、各章で提示した分析結果と考察をまとめるとともに、日本と韓国、女性同士と男性同士の会話に見られるポライトネスのありかたと、日韓の対人関係の捉え方、ジェンダー役割との関係を総合的に考察し、友人という人間関係の日韓の捉え方の相違が会話のマクロ構造の相違をもたらし、そのなかで各文化に期待されるジェンダー役割が相互行為におけるポライトネスのミクロ構造を左右すると述べている。

【論文審査の結果の要旨】

本研究は、日韓の親しい間柄の女性同士と男性同士の自由会話に観察されるポライトネスの異同を、相互行為という視点から明らかにしようとしたものである。従来のポライトネスを対象とした日韓対照研究は、勧誘や断りなどの発話行為やあいづちなどの言語行動を取り上げて、そこで使用される特定の言語形式やストラテジーに注目して分析するものが多かった。しかし、ポライトネスの研究において重要なのは、相互行為の過程全体において、どのような装置が参加者の関係を構築し、維持するのに寄与しているかということである。本論文は研究の対象を大幅に拡張して相互行為のプロセスをまるごと分析の対象とし、話題管理、発話開始、会話展開の方法、語り連鎖、直接話法や冗談の使用、あるいは同意や共感の表示などの面において話し手と聞き手が使用するポライトネス・ストラテジーを包括的に分析することによって、これまで指摘されてこなかった、あるいはエピソード的には指摘されても実証されてこなかった相互行為や対人配慮の様相を明示的に示すことに成功している。

ただし、問題点がないわけではない。たとえば、用いた会話資料の文字化の方法により厳密な記載様式が望まれるところがある。また、分析全般にわたって、話し手と聞き手による会話の共同構築といった視点がさらに必要であり、個々の分析においても、ある行為が繰り返し観察されたといった記載が多いが、それがどの程度の頻度で生起したかの記載がない。数値の記載がある箇所も、対象とした複数のペアを総合して分析しているためにペア間の偏りが把握できないなどの問題がある。その他、指摘された特徴が、本論文が対象とした話者の方言に局所的に見られる特徴なのか、日韓それぞれの文化に普遍的な特徴であるのかの検討がほしい箇所も散見された。

このようにいくつかの問題点は残されているが、これらはむしろ、異性間の会話の分析とあわせ、今後の発展のための課題として捉えられるべき性質のものであって、日韓の親しい間柄の女性同士と男性同士の自由会話に観察されるポライトネスの異同を相互行為の視点から総合的に解明しようとした本論文の本質的な価値を損なうものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。